

飯能市公共施設を活用した「生涯学習論」の展開 —あけぼの子ども森公園を活用したアクティブ・ラーニングの試み—

狐塚賢一郎

I. はじめに

「生涯学習論」(2年次/2単位)は、現代文化学部2013年度設置カリキュラムでは専攻科目群、コース共通科目、オン・キャンパス科目に位置付けられている。コース共通科目群では、国際文化コミュニケーション・観光ホスピタリティ・スポーツ文化の各コース履修の基礎となる日本や世界の文化を学び、豊かな表現力と国際感覚を身につけるための科目が設置されている。「オン・キャンパス」で理論を学び、「フィールドスタディ科目群」は主な教場を学外に求めた体験重視型の科目であり、大学キャンパスから一歩踏み出し、地域社会、地域の歴史や文化及び自然を教材として、あるいは海外に飛び出して、体験的に学習することを目的としている。オン・キャンパス科目からは6単位以上の単位を修得する必要がある¹⁾。また駿河台大学設置の教職課程では「教科または教職に関する科目」に位置付けられている²⁾。

上記のような科目の一つとして「生涯学習論」では、

- ① 生涯学習についての理解を深める。
- ② 自分のニーズにあった生涯学習活動の方法を取捨選択し、生活に取り入れていく能力を身につけ、情報収集能力、問題解決能力を涵養することを授業の目的としている。

本研究では、以下のような手法により生涯学習論の授業を省察し、その改善点を見出すことを目的としている。第1に2015年度、2016年度開講の生涯学習論の授業アンケートをもとに授業の省察を行う。第2に当該授業の授業運営の中で具体的なアクティブ・ラーニングの取り組みの一つとしての「トーベ・ヤンソンあけぼの子ども森公園」(以下「あけぼの子ども森公園」)訪問の成果

を訪問時の学生アンケートから省察する。以上、2つの側面からの省察を通し、履修学生がより積極的に授業に関わり、自らの生涯学習の手法を取捨選択できる能力を修得するために、より学びの深い科目となるよう今後の改善点を明らかにすることを目的とする。

II. アクティブ・ラーニングを取り入れた「生涯学習論」

1. アクティブ・ラーニングの導入

本授業へのアクティブ・ラーニング導入に際し、まずアクティブ・ラーニングの定義、当該授業へのアクティブ・ラーニング導入の意義について下記の通り整理する。

中央教育審議会(2012)はその答申の中で「アクティブ・ラーニング」の定義、大学教育におけるアクティブ・ラーニングの必要性を下記のように示しており、内閣(2013)は教育振興基本計画の閣議決定において、教職課程におけるアクティブ・ラーニングの重要性を下記のように示している。

(1) アクティブ・ラーニングの定義

教員による一方向的な講義形成期の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのディベート、グループ・ディスカッション等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である³⁾。

(2) 大学教育におけるアクティブ・ラーニング

学士課程教育の質的転換

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し会を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習は実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである⁴⁾。

(3) 教職課程におけるアクティブ・ラーニングの重要性

アクティブ・ラーニングに関する指導力や適切な評価方法は、全ての学校種の教員が身につけるべき能力や技能であり、教職課程において、これらの育成が適切に行われるよう、児童生徒の深い理解を伴う学習過程やそのための各教科の指導法に関する授業に取り入れていくことが必要である。また、アクティブ・ラーニングの視点からの教育の充実のためには、教員養成課程における授業そのものを、課題探究的な内容や、学生同士で議論をして深め合うような内容としていくことも求められる⁵⁾。

(4) 生涯学習論に用いるアクティブ・ラーニングの形態

アクティブ・ラーニングの学びの特徴については以下の3つの柱があげられている。

(1) アクティブ・ラーニングの習得・活用・探求という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現で

きているかどうか。

(2) 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。

(3) 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか⁶⁾。

田中(2016)は特に(1)の学習プロセスに着目し、アクティブ・ラーニングを①習得学習、②活用学習、③探求学習の3つの学習レベルの積み上げとしてとらえている⁷⁾。

本「生涯学習論」では、授業内で取り扱う基礎的・基本的な知識を習得した上で、提示された学習課題を自力解決、協働解決し一斉検証する場として「あけぼの子どもの森公園」訪問を用いている。そういった観点から、本授業では①習得学習を基本とした授業展開を考えたい。

2. 授業内容

(1) 教科書

「生涯学習論」では、概論として生涯学習を俯瞰する観点から、「倉内史郎、鈴木眞理編著(1998)生涯学習の基礎、学文社」を教科書とし、適宜参考図書、参考になる映像やTV番組、映画等の紹介を行っている。

(2) 授業計画

授業は第1週目にイントロダクションとして授業の目標、概要、進め方、教科書の紹介等を行い、第2週目から授業内容の講義を行っている。

その中で、授業後半の1回をそれまでの授業内容の確認と振り返りを踏まえ、習得した知識を用いての具体的なアクティブ・ラーニングの一環として近隣の「あけぼの子供の森公園」訪問を行っている。また、1回を学外講師を招いての授業内講演会に当てている。その上で第15週目を試験と授業全体の振り返りを行いまとめとしている。

(3) 授業展開

通常授業では、出席確認の後、前回実施した小テストの解答確認、解説・補足等を行い、当該授業内容の講義、講義内容に関連した映像資料等の視聴を行い、授業最後の10分程度で前回授業内容について小テストを行っている。

授業内では、履修者の発言を促し、発表を求めるなど、双方向的な授業運営を心がけているが、毎時間出席カードを配布し、裏面をリアクションペーパー、小テスト解答用紙として活用し、採点を付し、コメントを記入するなどして返却している。

授業時間配分

- 0～5分 出席確認
- 5～15分 前回小テストの解答確認、解説
- 15～60分 授業内容の講義
- 60～80分 講義内容に関連した映像資料等視聴
- 80～90分 小テスト（前回授業内容）

(4) 評価

期末筆記試験30%、課題（レポート）評価20%、平常点（授業での取り組み及び小テスト結果）50%を基に総合的に評価する。

Ⅲ. 「トーベ・ヤンソンあけぼの子どもの森公園」 訪問の意義

「トーベ・ヤンソンあけぼの子どもの森公園」（以下「あけぼの子どもの森公園」）は埼玉県飯能市阿須に開設されている公園で、駿河台大学からも徒歩10分ほどの距離にあるが、「生涯学習論」履修学生で訪問したことがある学生は少なくあまり馴染みのない場所である。

以下に、公園の概要を整理する。

1. 公園の概要

(1) 公園の概要

「あけぼの子どもの森公園」は、建設省の公園事業「平成記念子供の森公園」の指定を受けた全国一五カ所の都市公園の一つとして本年（1997年）七月一日にオープンした自然公園である。二世紀を担っていく子どもたちの健やかな健康に資す

るため、その活動の場となる緑豊かな公園として開園した⁸⁾。

(2) 公園の特徴

1) 公園のネーミング理由

- ① 平成新時代、二世紀の幕開け
- ② 飯能市の東南に位置し、日の出の方向と一致する。
- ③ 約70から200万年前に生息していたあけぼの象の化石がこの付近で発見されている。
- ④ 現在も採掘されている亜炭の材化石の一つにメタセコイヤ（和名：あけぼの杉）がある。ことなどから付けられた。

2) ムーミン童話を公園に取り入れた理由

a) ムーミンを選定した意義

- ① 童話の中の登場人物たちは、全員が独特な個性を持ち、大自然の中でのびのびと活動し、生活することが物語の展開となっている。個々のキャラクターは、新しい児童（人間）像として新時代を担うにふさわしい。
- ② 30年以上にわたって、子どもたちを中心に多くの人々に愛と夢を与え続けている。
- ③ 『ムーミン』を単に“メルヘン”としてではなく、フィンランドの森と湖を中心とした恵まれた自然環境という背景を持った児童文学としてとらえた。

b) 飯能市との関係

- ① 物語を展開する北欧の美しい自然の中に息づく『ムーミン谷（みどりの谷間）』という舞台は、小さな谷を含んだ起伏のある公園区域と類似している。
- ② 豊かな緑と澄んだ水（清流）の自然を背景とする物語を展開している舞台は、本市のまちづくりの基本理念である緑と清流を基調としたまちづくりと合致している⁹⁾。

(3) 施設の概要

1) 全体計画

本公園は、加治丘陵北側の斜面を利用しており、全体面積は、約7.6haである。そのうち約2haが平

地部で、残りは既存のまま利用している。

ここには、さまざまな個性ある生き物たちが、自然の中で共存しながら、1つの大きなドラマを展開していくムーミン童話の世界にふさわしいように個々の建物（子ども劇場、ムーミン屋敷、森の家）も童話の中の登場人物のキャラクターの色合いのように、個性的で独自の存在とさせている。

この主要な3つの建物を配置しながら、

- ① イベント広場ゾーン：子ども劇場と森の家との2つの建物の間にある同的活動の場所
- ② ムーミン広場ゾーン：ムーミン屋敷の建物、花や木、芝生などの静的な場所
- ③ 水辺ゾーン：わんぱく池を中心に水あび小屋がある。
- ④ 冒険の森ゾーン：樹上の家等がある。
- ⑤ 収穫ゾーン：段々畑がある。

上記の5つのゾーンに分け整備している。

2) 主要施設の紹介

- ① 子ども劇場（多目的ホール、事務室、トイレほか）

石と木と土という自然の材料を使用し、床に栗材のまくら木、壁には珪藻土、柱には地元の西川材の檜の丸太を使用し、外観は、大地の割れ目からノソリと頭をもたげたような形の建物である。

- ② ムーミン屋敷（工作室、クッキングルーム、いこいの広間、ムーミンホール、登場人物たちの部屋ほか）

童話の中に描かれているムーミン屋敷は、塔状の建物だが、ここでは互いに相反するもの同士が寄り添って1つになるという主旨を表現するため、2つのトックリのうち1つを逆さまにして抱き合わせたような形と成っている。盆地の中にひょっこりと生えたキノコのような建物である。

- ③ 森の家（展示、図書、資料の各コーナーほか）
地元西川材の檜の丸太を149本連結し、うねる形にして、壁と柱を一体化にした建物である。

展示、図書コーナーなどを備えた施設である¹⁰⁾。

2. 「トーベ・ヤンソンあけぼの子どもの森公園」訪問学習のねらい

半期15回の授業の後半11回目もしくは12回目に「あけぼの子どもの森公園」訪問を行っている。

(1) 訪問の目的

以下のような目的のもと「あけぼの子どもの森公園」訪問を行っている。

- 1) 子どもを対象に飯能市が「ムーミン童話」の世界を取り入れ、「自然との共生・自我と自由の尊重」という理念を掲げて建設した公園である「あけぼの子どもの森公園」の世界を体感する。
- 2) 公園内には豊かな自然の中に「ムーミン屋敷」「森の家」「子ども劇場」といった施設の子どもの学習活動を支援する機能について考える。
- 3) 大学近隣の学習支援施設訪問を通し、自分の身近な生涯学習支援施設にも目を向ける機会とする。

(2) 訪問の概要

- 1) 訪問週：半期15回の授業の第12週目(2017年度は7月第1週)に訪問を実施した。
- 2) 訪問の概要
大学から徒歩10分ほどの「あけぼの子どもの森公園」に現地集合し、公園内にヒントのある問題を記したプリントを配布した後、学生は1時間ほど問題を解きながら自由に公園内を散策する。

プリントの最も大きな課題は公園内の主要施設である子ども劇場、ムーミン屋敷、森の家の学習支援施設としてどのような役割をもっているかを考えることにある。

IV. 授業アンケート結果を基にした省察

2015年度及び2016年度に実施した授業アンケートをもとに授業全体の省察を行う。

1. 対象

2015年度及び2016年度に「生涯学習論」を履修した学生を対象に下記の授業アンケートを実施し

た。

- 1) 2015年度履修者63名 回答者数50名 (男子43名, 女子6名, 無回答1名)
- 2) 2016年度履修者78名 回答者数77名 (男子61名, 女子15名, 無回答1名)

2. 調査内容・方法

アンケートは授業全15週中第13週目を実施し、当該授業に出席していた学生を対象に行った。

アンケート内容は教職課程科目共通の内容とし、アンケート項目、質問内容は下記のとおりである。

- ① 欠席回数
この授業の欠席回数はどれくらいでしたか？
- ② 授業はシラバスの授業計画に沿って行われているか
この授業はシラバスの授業計画に沿って行われていますか？
- ③ 授業進度は適切であったか
この授業の進みぐあいは適切ですか？
- ④ 担当教員の熱意をもって授業を進めているか
担当教員は熱意をもって授業を進めていますか？
- ⑤ テキスト、配布資料は授業理解の役に立ったか
テキストや配付資料は授業を理解する上で役に立っていますか？
- ⑥ この授業の自学自習時間はどれくらいであったか
この授業のために週平均どれくらい自習していますか？
- ⑦ 授業目標は明確に示されていたか
この授業全体の目標はシラバスあるいは授業開始時に明確に示されていましたか？
- ⑧ この授業が目指している知識、能力、技術は身についたか
この授業が目指している知識や能力や技術が身についてきていると感じますか？
- ⑨ 授業の受講満足度
この授業を受講して、満足していますか？
- ⑩ 授業内容の総合的評価
この授業の内容を総合的に評価してください。
- ⑪ この授業へ取り組み自己評価

この授業に対するあなたの取り組みを自己評価してください。

- ⑫ 教職課程の履修動機
教職課程を履修した動機はなんですか？
- ⑬ この授業で身についた駿大社会人基礎力はこの授業を通じてどの駿大社会人基礎力が身についてきていると感じますか？
- ⑭ 授業技術の方法
教員の授業の仕方はどうでしたか？
- ⑮ 授業の改善方法
今後、この授業を改善していくためには、以下のどれを充実・活用していくとよいと思いますか？
- ⑯ この授業で教職を目指す上で身についた能力
教職に必要な知識や考え方のうち、この授業を通じて身についたと思うのはどれですか？

3. 授業アンケート結果及び考察

- ① 欠席回数
2015年度では欠席回数0回が30.0% (15名)、1～3回が64.0% (32名)、2016年度では、欠席回数0回が33.8% (26名)、1～3回が50.6% (39名)であった。

「教職または教科に関する科目」でもあるため、教職課程履修者等、目標・モチベーションが明確である履修者が多かったため、出席率も高かったものと考えられる。

表2 欠席回数

Q1 欠席回数	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 0回	15	30.0%	26	33.8%
2 1～3回	32	64.0%	39	50.6%
3 4～7回	2	4.0%	7	9.1%
4 8～11回	1	2.0%	2	2.6%
5 12回以上	0	0.0%	1	1.3%
無回答・範囲外値	0	0.0%	2	2.6%

② 授業計画はシラバスのとおりであったか

2015年度では、シラバスを読んでいないが36.0% (18名), ある程度シラバスに沿っているが28.0% (14名), あまりシラバスに沿っていないが22.0% (11名)であった。2016年度では、シラバスを読んでいないが46.8% (36名), 「4 ある程度シラバスに沿っている」が20.8% (16名), 「5 きちんとシラバスに沿っている」が14.3% (11名), 「3 あまりシラバスに沿っていない」が13.0% (10名)であった。

現在、シラバスは駿河台大学設置のポータルサイト「ポタロウ」上で確認することになっている。しかし「ポタロウ」上でシラバスを確認する学生が多くないため、授業初回時にプリントアウトした授業計画を学生に配布し、授業目標や授業計画等を確認している。

2015年度では、適切であるが74.0% (37名), やや早い16.0% (8名), 非常に早い6.0% (3名)であった。2016年度は適切であるが72.7% (56名), やや早い10.4% (8名), やや遅い9.1% (7名), 非常に早い5.2% (4名)であった。

また、1～5の平均は2015年度が2.8, 2016年度が2.9であった。

授業進度は、当初のシラバスの授業計画等、履修者に示した通り、実施することができたが、1回ごとの授業では解説や関連事項の説明等に十分に時間をかけることができなかったことが授業進度が「やや早い」という評価につながっていたものとする。

表3 授業計画はシラバス通りか

Q2 シラバス 授業計画	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 シラバスを読んでいない	18	36.0%	36	46.8%
2 全くシラバスに沿っていない	2	4.0%	4	5.2%
3 あまりシラバスに沿っていない	11	22.0%	10	13.0%
4 ある程度シラバスに沿っている	14	28.0%	16	20.8%
5 きちんとシラバスに沿っている	5	10.0%	11	14.3%
無回答・範囲外値	0	0.0%	0	0.0%

④ 担当教員の熱意はあったか

2015年度では、「4 ある程度熱意を感じる」が38.0% (19名), 「5 大変熱意を感じる」が30.0% (15名), 「3 どちらともいえない」が28.0% (14名), 「1 全く熱意を感じない」「2 あまり熱意を感じない」がそれぞれ2.0% (1名)であった。

2016年度では、「4 ある程度熱意を感じる」が39.0% (30名), 「5 大変熱意を感じる」が36.4% (28名), 「3 どちらともいえない」が19.5% (15名), 「1 全く熱意を感じない」がそれぞれ5.2% (4名)であった。

また、1～5の平均は2015年度で3.9, 2016年度で4.0であった。

③ 授業進度は適切であったか

両年度ともにこの項目では高評価になっているが、学外授業や授業内講演会など、単なる座学だけでない授業展開の導入を学生が教員の熱意と受けとったことも一因となっていると考える。

表4 授業進度

Q3 授業進度	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 非常に早い	3	6.0%	4	5.2%
2 やや早い	8	16.0%	8	10.4%
3 適切である	37	74.0%	56	72.7%
4 やや遅い	1	2.0%	7	9.1%
5 非常に遅い	1	2.0%	2	2.6%
無回答・範囲外値	0	0.0%	0	0.0%
1～5の平均	2.8		2.9	

表5 担当教員の熱意

Q4 担当教員熱意	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 全く熱意を感じない	1	2.0%	4	5.2%
2 あまり熱意を感じない	1	2.0%	0	0.0%
3 どちらともいえない	14	28.0%	15	19.5%
4 ある程度熱意を感じる	19	38.0%	30	39.0%
5 大変熱意を感じる	15	30.0%	28	36.4%
無回答・範囲外値	0	0.0%	0	0.0%
1～5の平均	3.9		4.0	

⑤ テキスト、配布資料は授業理解の役に立ったか

表6 テキスト、配布資料は役にたったか

Q5 テキスト配布資料	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 全く役にたっていない	5	10.0%	3	3.9%
2 あまり役にたっていない	1	2.0%	3	3.9%
3 どちらともいえない	16	32.0%	19	24.7%
4 まずまず役にたっている	16	32.0%	26	33.8%
5 たいへん役にたっている	12	24.0%	26	33.8%
無回答・範囲外値	0	0.0%	0	0.0%
1～5の平均	3.6		3.9	

2015年度では、「4 まずまず役にたっている」、「3 どちらともいえない」がそれぞれ32.0% (16名)、「5 たいへん役にたっている」が24.0% (12名)、「1 全く役にたっていない」が10.0% (5名)であった。

2016年度では、「4 まずまず役にたっている」、「5 たいへん役にたっている」がそれぞれ33.8% (26名)、「3 どちらともいえない」が24.7% (19名)、「1 全く役にたっていない」、「あまり役にたっていない」が3.9% (3名)であった。

また、1～5の平均は2015年度で3.6、2016年度で3.9であった。

この授業は各授業回ごとにレジュメを配布し、パワーポイントを中心として授業を展開している。学生のアンケートの結果からは、授業に即したレジュメの使い方ができているのではないかと考える。

⑥ 授業時間以外での自学自習時間はどれくらいであったか

2015年度では、「1 0分」が64.0% (32名)、「3 30分～1時間」が20.0% (10名)、「2 30分未満」が10.0% (5名)、「4 1時間～2時間」が4.0% (2名)であった。

2016年度では、「1 0分」が67.5% (52名)、「3 30分～1時間」が13.0% (10名)、「2 30分未満」が7.8% (6名)、「5 2時間以上」が6.5% (5名)、「4 1時間～2時間」が3.9% (3名)であった。

また、1～5の平均は2015年度、2016年度ともに1.7であった。

この授業では各授業の最後の15分程度で、前週の授業内容についての小テストを行っている。それを授業の復習の動機付けとしているが、実際には自習時間の増加につながっていないのが現状である。より自習時間を多くし、学生の学習効果を高める工夫として、通常の授業で予習、復習が必要となるような小テスト、期末テスト、授業内での課題の内容等を再検討する必要がある。

表7 授業のための自学自習時間

Q6 自学自習時間	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 0分	32	64.0%	52	67.5%
2 30分未満	5	10.0%	6	7.8%
3 30分～1時間	10	20.0%	10	13.0%
4 1時間～2時間	2	4.0%	3	3.9%
5 2時間以上	1	2.0%	5	6.5%
無回答・範囲外値	0	0.0%	1	1.3%
1～5の平均	1.7		1.7	

⑦ 授業目標の明示

2015年度では、「3 どちらともいえない」が48.0% (24名)、「4 まずまず明確だった」が32.0% (16名)、「5 たいへん明確だった」が14.0% (7名)、「1 何が目標かわからなかった」が6.0% (3名)であった。

2016年度では、「3 どちらともいえない」が

37.7% (29名), 「4 まずまず明確だった」が33.8% (26名), 「5 たいへん明確だった」が22.1% (17名), 「1 何が目標かわからなかった」が3.9% (3名)であった。

また、1～5の平均は2015年度で3.5, 2016年度で3.7であった。

この授業では

- ・生涯学習についての理解を深める。
 - ・自分のニーズにあった生涯学習活動の方法を取捨選択し, 生活に取り入れていく能力を身につけ, 情報収集能力, 問題解決能力を涵養する。
- ことを目標として授業運営を行った。第1回目授業において上記の目標を示し, 概ね学生に授業目標は共有されているが, 半期の授業を通して繰り返し目標の確認をし, 明確にしていく必要がある。

表8 授業の目標の明示

Q7 目標の明示	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 何が目標かわからなかった	3	6.0%	3	3.9%
2 やや明確でなかった	0	0.0%	2	2.6%
3 どちらともいえない	24	48.0%	29	37.7%
4 まずまず明確だった	16	32.0%	26	33.8%
5 たいへん明確だった	7	14.0%	17	22.1%
無回答・範囲外値	0	0.0%	0	0.0%
1～5の平均	3.5		3.7	

- ⑧ この授業を受講して知識, 能力, 技術は身についたか

表9 目標とする知識能力技術の習得

Q8 身についた知識能力技術	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 全く身につけていない	1	2.0%	3	3.9%
2 あまり身につけていない	4	8.0%	1	1.3%
3 どちらともいえない	22	44.0%	27	35.1%
4 ある程度身につけてきている	19	38.0%	33	42.9%
5 十分に身につけてきている	4	8.0%	13	16.9%
無回答・範囲外値	0	0.0%	0	0.0%
1～5の平均	3.4		3.7	

2015年度では, 「3 どちらともいえない」が44.0% (22名), 「4 ある程度身につけてきている」が38.0% (19名), 「5 十分に身につけてきている」, 「2 あまり身につけていない」が8.0% (4名)であった。

2016年度では, 「4 ある程度身につけてきている」が42.9% (33名), 「3 どちらともいえない」が35.1% (27名), 「5 十分に身につけてきている」が16.9% (13名), 「1 全く身につけていない」が3.9% (3名)であった。

また、1～5の平均は2015年度が3.4, 2016年度が3.7であった。

2015年度の得点の平均が3.4, 2016年度の得点の平均が3.7と, 2016年度の方が高くなっている。

授業前半を基礎的な知識, 理論の習得にあて, 後半に「あけぼの子どもの森公園」訪問等の学外授業や授業内講演会等具体的な学習体験を通じた実践活動の中で身についた知識, 能力を実感できているのではないかと考える。

- ⑨ 受講満足度はどれくらいか

表10 受講満足度

Q9 受講満足度	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 全く満足していない	1	2.0%	2	2.0%
2 あまり満足していない	2	4.0%	5	6.5%
3 どちらともいえない	19	38.0%	20	26.0%
4 まずまず満足している	19	38.0%	24	31.2%
5 たいへん満足している	9	18.0%	26	33.8%
無回答・範囲外値	0	0.0%	0	0.0%
1～5の平均	3.7		3.9	

2015年度では, 「3 どちらともいえない」「4 まずまず満足している」が38.0% (19名), 「5 たいへん満足している」が18.0% (9名), 「2 あまり満足していない」が4.0% (2名)であった。

2016年度では, 「5 たいへん満足している」が33.8% (26名), 「4 まずまず満足している」が31.2% (24名), 「3 どちらともいえない」が26.0%

(20名), 「2 あまり満足していない」が6.5% (5名)であった。

また, 1~5の平均は2015年度で3.7, 2016年度で3.9であった。

2015年度, 2016年度ともに受講満足度は高い履修者が多いことがわかる。この結果が授業内容の総合的評価, 授業の取組みの自己評価とも連関しているものとする。

⑩ 授業内容の総合的評価

表11 授業内容の総合的評価

Q10 総合評価	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 非常に良くなかった	1	2.0%	3	3.9%
2 あまり良くなかった	0	0.0%	1	1.3%
3 どちらともいえない	19	38.0%	19	24.7%
4 まずまず良かった	19	38.0%	32	41.6%
5 非常に良かった	10	20.0%	21	27.3%
無回答・範囲外値	1	2.0%	1	1.3%
1~5の平均	3.8		3.9	

2015年度では, 「3 どちらともいえない」「4 まずまず良かった」が38.0% (19名), 「5 非常に良かった」が20.0% (10名)であった。

2016年度では, 「4 まずまず良かった」が41.6% (32名), 「5 非常に良かった」が27.3% (21名), 「3 どちらともいえない」が24.7% (19名), 「1 非常に良くなかった」が3.9% (3名)であった。

また, 1~5の平均は2015年度で3.8, 2016年度で3.9であった。

2015年度, 2016年度ともに授業への取組みの自己評価の平均では4.0に近く, 授業内容の総合的評価としてはよかったと感じている履修者が多いことがわかる。この結果が受講満足度, 授業の取組みの自己評価とも連関しているものとする。

⑪ 自分の授業への取組みはどうだったか

2015年度では, 「3 どちらともいえない」が42.0% (21名), 「4 まずまず良かった」が36.0%

(18名), 「5 非常に良かった」が16.0% (8名)であった。

2016年度では, 「4 まずまず良かった」が37.7% (29名), 「3 どちらともいえない」が24.7% (19名), 「5 非常に良かった」が22.1% (17名), 「1 非常に良くなかった」が3.9% (3名)であった。

また, 1~5の平均は2015年度で3.7, 2016年度で3.8であった。

2015年度, 2016年度ともに授業への取組みの自己評価の平均では4.0に近く, 自己評価としてはよかったと感じている履修者が多いことがわかる。この結果が⑨受講満足度, ⑩授業内容の総合的評価とも連関しているものとする。

表12 授業への取組みの自己評価

Q11 取組自己評価	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 非常に良くなかった	1	2.0%	3	3.9%
2 あまり良くなかった	0	0.0%	0	0.0%
3 どちらともいえない	21	42.0%	19	24.7%
4 まずまず良かった	18	36.0%	29	37.7%
5 非常に良かった	8	16.0%	17	22.1%
無回答・範囲外値	2	4.0%	9	11.7%
1~5の平均	3.7		3.8	

⑫ この授業で身についた駿大社会人基礎力は

身についた駿大社会人基礎力としては, 2015年度では, 「1 基礎的な力」が30.0% (15名), 「2 考える力」が20.0% (10名), 「5 総合的な力」が10.0% (5名), 「3 行動に移す力」が6.0% (3名), 無回答・範囲外値が(60.0%)30名であった。

2016年度では, 「1 基礎的な力」が42.9% (33名), 「2 考える力」が36.4% (28名), 「5 総合的な力」が11.7% (9名), 「3 行動に移す力」が10.4% (8名), 「協働する力」が5.2% (4名), 「無回答・範囲外値」が(44.2%)34名であった。

この授業では, 生涯学習についての概論的な内容を扱うため, 基礎的な知識や考え方が身についたと感じる学生が多かった。また, それをもとに

自ら必要な生涯学習を取捨選択する力をつけることをもう一つのねらいとしており、2016年度については考える力が身についたと感じる学生が多くなっている点は評価できる。

表13 身についた駿大社会人基礎力

Q13 駿大社会人基礎力 (複数回答)	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 基礎的な力	15	30.0%	33	42.9%
2 考える力	10	20.0%	28	36.4%
3 行動に移す力	3	6.0%	8	10.4%
4 協働する力	0	0%	4	5.2%
5 総合的な力	5	10.0%	9	11.7%
無回答・範囲外値	30	60.0%	34	44.2%

⑬ 授業技術の方法の評価

表14 授業技術の方法評価

Q14 授業技術 (複数回答可)	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 話し方がよかった	15	30.0%	39	50.6%
2 話し方が悪かった	1	2.0%	0	0.0%
3 板書の仕方が良かった	1	2.0%	4	5.2%
4 板書の仕方が悪かった	0	0.0%	0	0.0%
5 機器の利用が適切	11	22.0%	24	31.2%
6 機器の利用が不適切	0	0.0%	0	0.0%
無回答・範囲外値	30	60.0%	35	45.5%

授業技術の方法評価では、2015年度は、「1 話し方がよかった」が48.6% (18名)、「5 機器の利用が適切」が5.4% (2名)、無回答・範囲外値が(48.6%) 18名であった。

2016年度では、「1 話し方がよかった」が66.7% (28名)、「5 機器の利用が適切」が31.0% (13名)、「板書の仕方が良かった」が11.9% (5名)、「2 話し方が悪かった」が4.8% (2名)、「4 板書の仕方が悪かった」「6 機器の利用が不適切」がそれぞれ2.4% (1名)、無回答・範囲外値が(31.0%) 13名であった。

レジュメを中心教材とした授業であるため、口頭での説明の仕方が単調にならないように配慮し履修者の集中が続くよう心掛けた。

⑭ 授業の改善方法

表15 授業の改善方法

Q15 授業改善方法 (複数回答可)	2015		2016	
	回答数	解答率	回答数	解答率
1 テキスト・配布資料	8	16.0%	7	9.1%
2 板書	3	6.0%	7	9.1%
3 AV機器	2	4.0%	1	1.3%
4 パソコン	1	2.0%	0	0.0%
5 SA	0	0.0%	0	0.0%
6 小テスト	1	2.0%	0	0.0%
7 教室外での学習	1	2.0%	3	3.9%
8 私語への対応	0	0.0%	1	1.3%
9 学生の意見や質問	0	0.0%	4	5.2%
0 学生参加型授業	1	2.0%	0	0.0%
無回答・範囲外値	36	72.0%	57	74.0%

授業の改善方法としては、2015年度は「1 テキスト・配布資料」が16.0% (8名)、「2 板書」が6.0% (3名)、「3 AV機器」が4.0% (2名)、「4 パソコン」「6 小テスト」「7 教室外での学習」「0 学生参加型授業」が2.0% (1名)、無回答・範囲外値が72.0% (36名)であった。2016年度は「1 テキスト・配布資料」「2 板書」が9.1% (7名)、「9 学生の意見や質問」が5.2% (4名)、「7 教室外での学習」が3.9% (3名)、「3 AV機器」「8 私語への対応」が1.3% (1名)、無回答・範囲外値が74.0% (54名)であった。

この授業ではレジュメとパワーポイントを主な教材として授業を展開している。そのため「1 テキスト・配布資料」の改善を指摘する意見が多数あったが、同時にポイントとなる箇所の強調やキーワードの確認等に板書などを的確に行う必要がある。授業においては、レジュメの他にパワーポイントを作成し、両者を併用しながら授業を行っているが、これらにもより学生が授業に集中しや

すい工夫が必要である。

V. 「あけぼの森公園」訪問についての省察

2017年度は「あけぼの子どもの森公園」訪問時に下記5項目のアンケートを実施した。当該アンケートの結果を分析することで、当該年度の「あけぼの森公園」訪問のふりかえりとしていたい。なお、本論考で用いた授業アンケートは2015年度及び2016年度のものであり、授業アンケートと公園訪問時のアンケートが関連していないことを付記する。

1. 対象

2017年度「生涯学習論」履修学生のうち、「あけぼの子どもの森公園」を訪問した学生を対象に下記の授業アンケートを実施した。

「あけぼの子どもの森公園」訪問者100名（2017年度履修登録者120名）

2. 調査内容・方法

アンケートは授業全15週中第12週目に実施し、当該授業に出席していた学生を対象に行った。アンケート内容は下記のとおりである。

- ① 訪問で積極的・主体的に学ぶことができた。

表16 授業への取組みの自己評価

Q1 取組自己評価	2017	
	回答数	解答率
1 できなかった	3	3.0%
2 あまりできなかった	3	3.0%
3 どちらともいえない	3	3.0%
4 できた	46	46.0%
5 大いにできた	45	45.0%
無回答・範囲外値	0	0%
1～5の平均	4.3	

「4 できた」が46.0%（46名）、「5大いにできた」が45.0%（45名）、「1 できなかった」「2 あまりできなかった」「3 どちらともいえない」3.0%（3名）であった。また、1～5の平均は4.3であった。

訪問時に配布するプリントを手に、自由に散策しながら公園をまわる開放感や公園自体が持つ魅力もあり、学生は積極的に公園をまわりプリントの課題に取り組む姿勢が見られた。そういった学生の授業に取り組む姿勢が高い自己評価につながっているものと考え。

- ② 訪問で仲間同士での会話やコミュニケーションが深まった。

「5非常に深まった」が48.0%（48名）、「4 深まった」が45.0%（45名）、「3 どちらともいえない」4.0%（4名）、「2 あまり深まらなかった」2.0%（2名）、「1 深まらなかった」1.0%（1名）であった。また、1～5の平均は4.4であった。

公園訪問では、配布されたプリントをもち、自由に友達とコミュニケーションをとりながら協働で課題を解決することも大きな目的の一つとなっている。その意味で、仲間とのコミュニケーションが深まったと回答している学生が多く、公園訪問で協働解決としてのグループワークが活動として行われていることが示唆されている。

表17 仲間とのコミュニケーション

Q2 仲間とのコミュニケーション	2017	
	回答数	解答率
1 深まらなかった	1	1.0%
2 あまり深まらなかった	2	2.0%
3 どちらともいえない	4	4.0%
4 深まった	45	45.0%
5 非常に深まった	48	48.0%
無回答・範囲外値	0	0%
1～5の平均	4.4	

- ③ 訪問で新しい発見があった。

「5 大いにあった」が41.0%（41名）、「4 あった」が47.0%（47名）、「3 どちらともいえない」9.0%（9名）、「2 あまりなかった」2.0%（2名）、「1 なかった」1.0%（1名）であった。また、1～5の平均は4.3であった。

学生からの自由記述で多い感想が、「大学の近隣にこのような施設があることを初めて知った。」
 「とてもよくできている施設で、ぜひ授業以外の時にも改めて訪問してみたい」というものであった。多くの学生が、公園訪問によって、何らかの新しい発見をしていることがわかる。

表18 訪問しての新しい発見

Q3 訪問しての発見	2017	
	回答数	解答率
1 なかった	1	1.0%
2 あまりなかった	2	2.0%
3 どちらともいえない	9	9.0%
4 あった	47	47.0%
5 大いにあった	41	41.0%
無回答・範囲外値	0	0%
1～5の平均	4.3	

④ 訪問は授業内容の理解に役立った。

表19 授業内容理解への効果

Q4 授業内容理解への効果	2017	
	回答数	解答率
1 役立たなかった	1	1.0%
2 あまり役立たなかった	1	1.0%
3 どちらともいえない	8	8.0%
4 役立った	50	50.0%
5 非常に役立った	40	40.0%
無回答・範囲外値	0	0%
1～5の平均	4.3	

「4役立った」が50.0% (50名), 「5非常に役立った」が40.0% (40名), 「3 どちらともいえない」8.0% (8名) 「2 あまり深まらなかった」1.0% (1名) であった。また、1～5の平均は4.3であった。

多くの学生が授業内容理解に役立ったと回答している。授業前半を生涯学習についての基礎的な理論・知識の習得にあてているが、近隣の当該施設訪問という実践を通して、知識理解を深めるこ

とに役立っていることが示唆された。

⑤ 訪問で他の生涯学習施設に行ってみようという意欲が湧いた。

「4意欲がわいた」が45.0% (45名), 「5非常に意欲がわいた」が43.0% (43名), 「3 どちらともいえない」9.0% (9名) 「1 わかなかった」2.0% (2名), 「2 あまりわかなかった」1.0% (1名) であった。また、1～5の平均は4.3であった。

履修学生は、生活圏にある生涯学習施設の存在に気づいていなかったり、興味をもっていない者が大半であった。その意味で、他の学習支援施設にも目を向け自らの生涯学習の支援施設として利用するきっかけとなることがこの「あけぼの子ども森公園」訪問の大きな目的の1つである。

表20 他の生涯学習施設への興味・関心

Q5 他の生涯学習施設への興味・関心	2017	
	回答数	解答率
1 わかなかった	2	2.0%
2 あまりわかなかった	1	1.0%
3 どちらともいえない	9	9.0%
4 意欲がわいた	45	45.0%
5 非常に意欲がわいた	43	43.0%
無回答・範囲外値	0	0%
1～5の平均	4.3	

VI. 授業のふりかえり

1. 課題の抽出

「生涯学習論」での授業アンケートの振り返り、「あけぼの子ども森公園」訪問時のアンケートの省察から抽出された成果と課題は下記の通りである。

① 授業アンケート結果

(1) 成果

授業アンケート全体を通して、受講生に授業の目的や授業内容は概ね正確に把握されており、そのため授業満足度、授業内容の総合評価、授業への取り組みの自己評価等で高評価となっている。

(2) 課題

自学自習時間の増加、テキストや授業資料の改善、授業方法の改善等が挙げられる。

② 「あけぼの子どもの森公園」訪問時アンケート結果

(1) 成果

「あけぼの子どもの森公園」訪問時アンケート全体を通して、受講生に本訪問が授業内容理解、新しい発見、他の生涯学習支援施設への興味喚起に一定の効果があることが示唆されている。

(2) 課題

訪問がより深い学びとなるよう「あけぼの子どもの森公園」訪問時の配布資料への協働解決を促進するための「仕掛け」を工夫することや他の近隣生涯学習支援施設利用を授業に加え「あけぼの子どもの森公園」との比較を通しての授業内容の整理、ふりかえりが挙げられる。

③ アクティブ・ラーニングの側面からの省察

アクティブ・ラーニングの観点から当該授業の学習内容に照らし合わせて、最適な学習プロセスを検討したところ、「習得学習」の学習プロセスを当てはめるのが適当であると考えられる。

この習得学習の授業全体の活動系列を示すと

- 第1段階 ↓ ①学習活動の提示
- 第2段階 ↓ ②解決の見通し
- 第3段階 ↓ ③自力解決
- 第4段階 ↓ ④協働解決
- 第5段階 ↓ ⑤一斉検証
- 第6段階 ↓ ⑥まとめと振り返り¹¹⁾

という流れが授業展開の基本となる。これを当該授業に当てはめると下記のような学習活動の具体案としたい。

① 学習活動の提示

教員による課題の提示として、授業前半で生涯学習支援施設の意義・役割を提示し、それを踏ま

え「あけぼの子どもの森公園」訪問時に公園内3施設（ムーミン屋敷、子ども劇場、森の家）の学習支援役割についての質問を学習者に提示する。

② 解決の見通し

履修者が、それまでの授業のレジュメ等を使い学習支援施設の役割について整理する。

③ 自力解決

「あけぼの子どもの森公園」訪問時に配布しているレジュメを使った公園内3施設（ムーミン屋敷、子ども劇場、森の家）の学習支援役割を検討する。

④ 協働解決

③で作成した自分の考えをグループで共有しディスカッションするなどして、自らの検討をさらに深めていく機会をつくる。

⑤ 一斉検証

④でグループごとにまとめた意見を全体で発表・ディスカッションする機会をもち、履修者全体で考えを共有するとともに授業者にフィードバックし、授業者の振り返りの一助とする機会をもつ。

⑥ まとめと振り返り

⑤での、ディスカッション等を踏まえ、授業を振り返り、レポート等に文章化することで履修後の自らの学習活動時の問題解決能力涵養の基礎とする。

2. 改善策として

上記のように授業アンケート及び「あけぼの子どもの森公園」訪問時アンケートからの省察を踏まえ、アクティブ・ラーニングの学習プロセスを踏まえた授業の具体案を検討した上で、以下のような改善策を講じたい。

① 他の生涯学習施設の訪問・活用

大学近隣の他の生涯学習施設（公民館、図書館、博物館等）を授業の前半に訪問し、生涯学習支援施設の具体的なイメージをもちながら授業に臨める環境を整える。その上で、授業全体のまとめとして「あけぼの子どもの森公園」訪問を活用する。

② 協働解決に向けたワークシートの作成

「あけぼの子どもの森公園」訪問時の配布プリントは訪問の目的やねらいを明確化し、学習者の課題に対する自力解決の一助となっていることが訪問時のアンケートから示唆された。アクティブ・ラーニングの観点からはそれを踏まえた協働解決への展開として、自力解決した結果をグループで共有し、ディスカッションなどを通して自らの答えを客観化し、より学びを深める教材としてのワークシートを作成したい。

③一斉検証およびまとめと振り返りの場の設定

現在は「あけぼの子どもの森公園」訪問後の授業回でプリントの答え合わせ等を行い「あけぼの子どもの森公園」訪問のまとめを行っているが、グループでの答えを発表したり、それをもとにしたディスカッションなどを通して履修者全体で考えを共有し、それとともに授業全体の振り返りも同時に行いながら学びを深める機会をもちたい。

Ⅶ. まとめ

本研究では「生涯学習論」の授業で実施された2015年度、2016年度の授業アンケート及び2017年度の「あけぼの子どもの森公園」訪問時のアンケートをもとに、授業での成果、近隣の生涯学習施設訪問の意義を分析し、課題を抽出した上で、より学生の関わりの深いアクティブ・ラーニングにするための改善点を探った。

抽出された課題から検討される改善策は下記の通りである。

- ① 他の生涯学習支援施設の訪問・活用
- ② 協働解決に向けたワークシートの作成
- ③ 一斉検証およびまとめと振り返りの場の設定

「生涯学習論」において「あけぼの子どもの森公園」訪問が履修学生に授業内容の理解の上で有意義であったことが示唆されたが、より深い学びのための客観視と検証を今後も続けていきたい。

引用・参考文献

- 1) 駿河台大学現代文化学部教務課 (2017年) 2017年度駿河台大学現代文化学部履修ガイド. 駿河台大学教務課. 51頁
- 2) 駿河台大学教職課程委員会, (2016) 2016年度 教職課程履修ガイド 駿河台大学学務部教務課, pIV-34
- 3) 中央教育審議会, (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて (答申) 文部科学省, p37
- 4) 同上書, p9
- 5) 内閣, (2013) 閣議決定 教育振興基本計画, p45
- 6) 中央教育審議会, (2015) 教育課程企画特別部会 論点整理, 文部科学省, p18
- 7) 田中博之, (2016) アクティブ・ラーニング実践の手引き-各教科等で取り組み「主体的・協働的な学び」, 教育開発研究所, p35
- 8) 埼玉県飯能市都市計画部都市整備課, (1997) 公園緑地Vol. 58-3, 公園緑地協会, p18
- 9) 同上書, p18-19
- 10) 同上書, p19-20
- 11) 田中博之, 前掲書, p67